

アジア太平洋の人をつなぎ学びを育てる

ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

news

No. 422

【特集】 特別対談 田村 哲夫 × 鈴木 佑司

互いを知り、共有し、地道に積み上げていく
—ユネスコの理念を携えて



【掲載記事】

ユネスコ加盟75周年記念事業／ユネスコスクール全国大会
SMILE Asiaプロジェクト／Sustaining Our Oceans／
海外派遣プログラム参加者座談会

互いを知り、共有し、地道に積み上げていく —ユネスコの理念を携えて

財団として創設した1971年から半世紀以上となる2027年4月1日、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟と合併し、新たな一步を踏み出します。ACCUが団体として発行する最後の機関誌に寄せて、今日までの歩みを振り返り、ユネスコ活動にける思い、これからに期待することなどを両団体の理事長が語り合いました。



田村 哲夫 × 鈴木 佑司
Tetsuo Tamura Yuji Suzuki

ACCUが在する出版クラブビルの3F ライブラリーにて撮影

約20年前の教職員国際交流事業の様子。当時、韓国・中国それぞれ100人前後の教職員を招へいた。



——早速ですが、日本ユネスコ協会連盟（以下、協会連盟）の鈴木理事長から、協会連盟についてご紹介をお願いします。

鈴木 第二次世界大戦後の1947年、日本中に「平和国家として復活したい」という願いが広がり、ユネスコ協力会（現ユネスコ協会・クラブ。以下、ユ協）が宮城県仙台市で生まれました。同年に約50の地域でも誕生し、1948年にこれらを支援する組織として協会連盟が設立されました。ユ協は全国に広がり、2026年現在262の地域で1万人以上が活動され、企業やNGO、有識者等個人の方にもご協力いただいています。設立当時、世界で文化や伝統を大切に保存・共有していこうという運動があり、協会連盟は歴史的・文化的建造物の保存などの海外協力をしていました。その後、教育分野にも貢献すべく「世界寺子屋運動」というACCUのSMILE^{※1}のような識字教育を開始し、東南アジア、インド、アフリカまで広げました。1980年代からは日本の子どもの教育支援にも目を向け、2011年の東日本大震災以降、震災遺児への支援など、国内外で様々な活動を展開しています。特色、大きな強みとしては、地域の皆さんが地域で「ユネスコの理念」を実現し、次世代の教育に資するための全国ネットワークをもち、地に足がついた活動を行っていることだと思います。

——理事長になられたきっかけはどのようなものだったのでしょうか。

鈴木 1981年に、地域の平和研究をされている協会連盟の事務局の方からうちを手伝ってほしいと声を掛けられ、初めてユ協の仕事を知りました。昔、私の母が、ダム建設で沈むヌビア遺跡を救うための募金^{※2}に参加していて、小学生の私も手伝った「あのユネスコか！」となったことを覚えています。そこから世界各地のユネスコ協会連盟等との対外的な仕事に携わり、2017年に理事長に就任。以降は、各地での活動を支えてくださった方々への御恩をお返しすべく、ユネスコ本体のみならず他国の友人、民間ユネスコ活動の実態を世界にできるだけ早く、正確に伝えようと努めてまいりました。そういえば、アジア各地どこに行ってもACCUのことを知っている人がいたんです。彼らはACCUを“エキュー”と呼んでいました。それで、どこかでACCUの方たちと協力できたらいいなと思ったのが、ACCUとの出会いでした。

——これまでに嬉しかったこと、また、どんなご苦労がありましたか。

鈴木 例えば、草の根のユネスコ活動として若者が海岸で拾ったごみに外国語が印字されているのを見て、その国のごみ事情などに想像を巡らせる姿から「ユネスコの理念」が国境を越

え、人間同士がつながっていく様子が見えたこと。あるいは、私がユネスコ活動を始めた1980年代は日本の民間運動が先進的で、日本の事例を自国で生かしたいと他国から言っていただけの機会が多かったことがとても嬉しかったです。他方、日本は単一社会だと言われますが、各地のユ協を見ても、それぞれが掲げる「ユネスコの理念」のアプローチ等が異なっており、非常に多様性に富んでいます。これらを尊重しながら共存させることはなかなか難しいと感じます。一緒であることが普通という考えが根深いところほどそれは顕著ですが、ユネスコが示す「多様性の尊重」という理念の下に、日本は決して単調ではなく非常に懐が深く可能性に満ちていることを伝えていきたいと思っています。

——ありがとうございます。

この機会に、田村理事長とACCUの出会い、理事長を務められたきっかけ、また、我々の活動への思いなども伺いたいと思います。

田村 私とACCUの出会いは2008年、中教審^{※3}の委員、教員養成部会の部会長を務めた流れで日本ユネスコ国内委員会の会長を引き受けた年です。日本では戦後、教育委員会の設置・整備の過程で仕事内容の一つに「ユネスコ活動への支援」という項目を入れましたが、私が中教審にいた頃に調べてみると支援実態が特になかったことが分かったので、ユネスコが提言していた標語を学習指導要領に入れました。それによって今では様々なユネスコ活動が全国に普及しましたが、その中にこれだけは続けなきゃいけないと思うものがあり、それが「平和

※1…SMILE Asia プロジェクト https://www.accu.or.jp/programme/project/smile_asia/ ※2…ユネスコの「ヌビア遺跡群救済キャンペーン」(参考:世界遺産検定サイト内 | <https://www.sekaken.jp/whinfo/monthwh/monthwh-w028/>) ※3…中央教育審議会(参考:文部科学省サイト内 | https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gaiyou/010201.htm)

——ACCU、協会連盟の活動が、交流の“種”に



たむら てつお
田村 哲夫

(公財)ユネスコ・アジア文化センター 理事長(2010年～)。学校法人渋谷教育学園及び学校法人青葉学園 東京医療保健大学 学園長、他。文部科学省中央教育審議会委員、日本私立中学高等学校連合会長、日本ユネスコ国内委員会会長などを歴任。

田村 EUは隣接国と何百年にもわたって戦争したという反省に立って、青少年交流から地道に積み上げ、国家間の連携、更には共通教科書まで作れた大きな成功例です。実は、日本でも同じことをやろうと、我々もお手伝いした経験があるけれど、どうしても最後のところで共通理解ができず諦めたんです。そういったことができずに、アメリカや欧州とただ交流するだけでいいのかと。

鈴木 なるほど。日中韓でも、教職員同士のネットワークによっていろんな人が協力して共通の副読本を作っていますが、教職員交流はそういう活動の“素地”を作る上で非常に重要ですね。ただ、教職員の安全面なども考慮して交流先を絞る側面もあるのかなと。

田村 ちなみに今日、EUの派遣でイタリアから自校^{※4}に留学していた生徒の卒業式がありまして、EUはEU以外の国とのこういった交流も地道に続けていますよ。だからまずは身近な日中韓で何かやれないか…ACCU、協会連盟の活動が、その“種”になればいいなとも思います。

鈴木 そうですね。いつかは教職員交流も交流先を広げ、平和の礎である「共通理解」、同じ考えをもたずとも共存はできるという考え方を共有していく努力を続けていきたいです。

田村 そう思います。

鈴木 どの国でも、戦争に関する教育は本当に難しい。おそらく田村理事長の世代が目指された平和学習の基礎、その重要性は今後も変わらないと思うんです。ただ、あまり過去に向けて深くコミットすると前に進まないし、ここを通らずに未来は見えない。この矛盾にどの国もぶつかっている。この点はどんなアプローチがあるでしょうか。

田村 地道に交流を続けていく以外にはないと思います。みんながそう思ってくれないと、前に進まないですね。

鈴木 まったく賛成です。

田村 一挙にはいかないから諦めずに、とにかく積み上げていくということではないでしょうか。そういう交流を続けるためにも、協会連盟は新しいパートナーとして、ぜひ、よろしくお願いします。

鈴木 ありがとうございます。もう一つ、教職員のみならず子どもたちの交流も大切で、日本は世界に先駆けてユネスコスクールをやっていますが、加盟校の増加に対して、活動が内向き傾向になっている点はどうしていけばいいのかと…。

田村 公立学校は教育委員会を通して活動するためどうしても国内に限定されますが、私立学校はユネスコスクールになることで国際化が進みます。だから、私立学校が前例を作ることも一つではないでしょうか。

学習」だったのです。私がACCUの理事長を引き受けた最大の理由が「教職員交流」で、これこそ平和学習であり、ACCUでは20年以上続けています。人類の歴史上、最大の平和学習と言われているのはEUの結成ですが、きっかけはドイツとフランスが青少年交流を相当の頻度で行ったことで、ヨーロッパ(以下、欧州)に共通教科書(歴史書)ができました。ただし原本は英語とフランス語のみで、ドイツ語では書かれておらず、それはドイツも認めています。そういう実績が平和につながる。そこを目指して教職員交流を続けてきたわけです。ところが、2009年に日本で変革が起きました。

鈴木 そうですね。

田村 ACCUはもともと、ユネスコ活動をアジア地域で普及していくため政府主導で作られたけれど、日本経済が縮小し始めたその頃に政府主導の体制を変えざるを得なくなったんです。でも、教職員交流だけは何とか残せないと考え、政府も、民間でやるなら応援するというので、個人的なつながりや企業等の協力を得てACCUは活動を続けることができました。今では日本と交流した教職員は韓国・中国で数千人に上り、タイやインドも加わりました。教職員が一人参加すれば何十、何百人という子どもに還元され、平和実現のために必ず効いてくるんです。付け加えると「ユネスコスクール」の発展も大きな成果と言えますね。私がやってきたような形で今後も続くかは分からないけれど、やれる範囲で引き継いでほしいですね。

——せっかくなので、理事長同士、聞いてみたかったことなどもお話しください。

鈴木 田村理事長もおっしゃるとおり、ユネスコ憲章の示す平和の礎という考えを国家間で共有しなければ、平和は続かないと思います。ACCUの教職員交流はアジアに絞られていますが、例えばアメリカなどかつて戦った国も含めてグローバルに交流することも意義があると感じますが、いかがでしょうか。

——「ユネスコの理念」を分かりやすく、誰でも参加できるように共有する



すずき ゆうじ
鈴木 佑司

(公社)日本ユネスコ協会連盟 理事長(2017年～)。インドネシア大学、マラヤ大学を経て法政大学教授。現在名誉教授。ジョンズホプキンス大学、オックスフォード大学客員教授を歴任。平和学会会長、アジア太平洋ユネスコ協会連盟、世界ユネスコ協会連盟会長を務めた。

鈴木 国際交流・国際理解は今後日本が世界の人と共存するために必要不可欠で、自ら外に出かけていく、あるいは来るものを拒まない子どもが増えていけば、教職員や学校にとっても必ずプラスになる。そういうインセンティブを私たちが少しでも果たしていきたいですね。

田村 そうです、そういう子どもが育たなければ、日本は立ち行かなくなる。

鈴木 他国の例や歴史からも、国際交流・国際理解の大切さを私たちは学んでいます。その意味でも、合併後もユネスコスクールの活動を推し進めたい。

田村 心配なのは、ユネスコに関する国の予算が益々減らされていることで、これはユネスコ活動が本当の意味で理解されていないということなんでしょうね。これからしっかり働きかけていかなければいけない。

鈴木 努力しないといけないですね。若者世代も競争社会で揉まれることが少なく保守的になりがちですが、外に目を向けると非常に精力的に活動しているところがあるので、そういった相手と交流できるようにしたいと思っています。

——2027年4月の合併に向けて、今後に期待することなどをお聞かせください。

鈴木 田村理事長から授かった考えですが、ユネスコという“平和のシンボル”を支える運動が世界で最初に日本で根付いたのは、戦争を二度と繰り返してはいけないという苦い教訓によるものであり、これを風化させないため私たちが手を携え、地域社会で「ユネスコの理念」を分かりやすく、誰でも参加できるように共有する。そして国際的に成熟した社会になるよう貢献できることを期待しています。また、日本は長期的な視点で誠実に約束を守り、実現できる国だと思っています。だからこそもっと外に目を向け、様々な交流をする。急速にグローバル化する社会に対応できる人材を育て、寄り添っていくACCUの強みも引き継いでいきたいと思っています。

田村 今日まで取り組んできたACCUの活動が、今後は協会連盟として続いていく見通しが立ったと私どもは考えています。組織の運営側も一生懸命協力したいと思いますので、これを機に、近年の良くない社会の動きにブレーキがかかるような雰囲気を感じていただき、若い力も発揮して、頑張ってくださいと思っています。

——最後に、ACCUを応援してくださる皆様や読者の皆様にメッセージをお願いします。

鈴木 教育を通じて平和を作っていくというユネスコの使命、これに直接関わる教職員や教育行政職員だけでなく“普通の皆さん”にも関心を持っていただき、近年ACCUでも特に力を入れている若者のユネスコ活動や「新時代の人たち」のためにも全力を尽くしますので、ぜひ参画してください。合併後もACCUが蓄えてきたノウハウやネットワーク、レガシーを引き継いでいけるよう努めてまいりますので、今後ともよろしく願いいたします。

田村 平和学習はこれから一層大事な時期に入ります。そのことをぜひご理解いただき、本当の平和学習とはどういうことなのかを考えていただく。そこにACCU、これからの協会連盟が貢献できるようになれば大変嬉しく思います。

——本日は、ありがとうございました。

(対談実施日：2026年7月21日)



次ページからは、ACCUの近年の活動紹介、事業参加者の声などをお届けします。

ユネスコ活動を通して“未来”につなぐ

戦後、日本が初めて加盟した国連機関「ユネスコ」。2026年は、同加盟から75周年となる節目の年です。ACCUは設立以来、ユネスコの理念の下、アジア太平洋諸国・地域の人びとと協力して持続可能な社会の実現に貢献してきました。現在、教育協力部では、文部科学省委託「ユネスコ未来共創プラットフォーム for 2030 ～UNESCOConnect～事業」の一環として、ユネスコの理念や活動の意義を広く発信し、国内のユネスコ活動の更なる活性化を図るための様々な関連事業に取り組んでいます。また、2008年より継続してユネスコスクール支援事業を行っています。

日本のユネスコ加盟75周年関連事業

75周年記念フォーラム

2026年5月20日、文部科学省・日本ユネスコ国内委員会、外務省、国際連合大学の主催で、「日本のユネスコ加盟75周年記念フォーラム」が国際連合大学(東京都渋谷区)で開催されました。ACCUはユネスコ未来共創プラットフォーム事務局として、本フォーラムの実施・運営を担いました。ハーリド・エルアナーニーユネスコ事務局長、松本洋平文部科学大臣、茂木敏充外務大臣のほか、俳優・ミュージシャンの松下奈緒さんにもご登壇いただくとともに、日本のユネスコ活動の歩みを振り返り、未来への展望を共有する場として全国のユネスコ活動関係者約200名が招待されました。日本ユネスコ協会連盟の佐藤美樹会長と鈴木佑司理事長、ACCUの田村哲夫理事長も出席しました。



エルアナーニーユネスコ事務局長と松下奈緒氏



国内ユネスコ活動関係者

開会式集合写真



フォーラム後の交流会での「鏡割り」

75周年記念動画

『日本のユネスコ活動75年のあゆみそして未来へ』

ユネスコ創設80周年でもあるこの節目に、ユネスコが今日までどのような活動に取り組んできたか、また、日本とユネスコのつながりや日本におけるユネスコ活動の歩み、そして、未来に向けた高校生の取組を紹介するため、記念動画を公開しました。プレゼンターには松下奈緒さんをお迎えしています。動画は75周年記念特設サイトからご覧いただけます。



75周年記念特設サイト

2026年1月より、ユネスコ加盟75周年を記念した特設サイトを開設・運営しています。同サイトでは、日本各地で行われる加盟75周年記念イベントをカレンダー形式でご紹介するほか、記念ポスターや動画等の関連資料をご覧いただけます。ぜひご活用ください！ロゴマークの利用及びイベントの登録申請もお待ちしております！



特設サイト



75周年記念 関連情報

『るるぶ 日本のユネスコ世界遺産・登録サイトをめぐる旅』が刊行されました！
本誌では、ユネスコに登録されている日本国内のユネスコ世界遺産、ユネスコ世界ジオパーク、ユネスコエコパーク、ユネスコ無形文化遺産、ユネスコ世界の記憶、ユネスコ創造都市の計92件を紹介しており、それぞれの歴史や魅力を学べる内容となっております。

ユネスコスクール等支援事業

ユネスコスクール全国大会(第17回)

2025年12月6日に第17回となる「ユネスコスクール全国大会」を上智大学(東京都千代田区)にて開催しました。「全国大会」は、全国のユネスコスクール関係者が一堂に会し、日頃の教育活動を振り返り、実践を共有する学びあいの場です。今回は会場及びオンラインで約400名が集い、「2023年ユネスコ教育勧告」の意義を再考する議論や、ユネスコスクールの生徒によるポスターセッション、また、分科会においてユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASPUnivNet)、ユネスコスクールの教員、ユネスコ活動に携わる方によるディスカッションやネットワークづくりなどが行われました。人と想いをつなぎ、未来への橋渡しとなるような素敵な一日となりました。ご参加いただきありがとうございました！



次回「ユネスコスクール全国大会」は2026年11月14日に開催決定！

今年度で第18回となる同大会は、2026年11月14日に国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都渋谷区)にて開催します。詳細は、ユネスコスクール公式ウェブサイトからご確認ください。皆様のご参加をお待ちしております！



ユネスコスクール
公式ウェブサイト

文字を学び、未来を描く —SMILE Asiaが支える女性たちの挑戦—



カンボジアでは、長く続いた政情不安と内戦の影響により、学校で十分な教育を受けることができず、読み書きを習得しないまま成人となった人びとが今も数多く暮らしています。特に女性の割合は高く、基礎的な識字能力を身につける機会が限られていることが、生活や子育て、社会参加に様々な影響を及ぼしています。

ACCUが2008年から実施しているSMILE Asia (Supporting Maternal and Child Health Improvement and Building Literate Environment)プロジェクトは、こうした状況にある妊婦や子育て中の女性を対象に、読み書きや計算を学ぶ機会を提供するとともに、母子保健や女性の権利に関する知識を身につけ、自らの人生を切り拓く力を育むことを目指しています。

学ぶのは、文字だけではなく。

健康について知ること。
子どもの成長を支えること。
地域の仲間とつながること。
そして、学びを通じて、
自分自身に自信を持ち、
未来への一歩を踏み出すこと。



コンセプト図(英語・クメール語詳細版)

SMILE Asia は、一人の女性の学びを、家族へ、そして村全体へと広げていく取組です。

SMILE Asia の特徴

- **識字と生活を結びつけた学び**
文字の読み書きや計算を学ぶだけでなく、女性の権利や家族の健康、保健衛生など、日々の暮らしに役立つ内容を教材に取り入れています。
- **保健センターとの連携による実践学習**
地域の保健センターから専門家を招き、妊娠・出産や乳幼児の健康に関する実践的な学びの機会を提供しています。
- **村の「読書コーナー」が支える識字環境**
各村には読書コーナーを設置。母親が学ぶ傍らで、子どもたちが本に親しむ姿も見られ、村全体の教育環境の向上につながっています。
- **学びが次の世代へ**
母親が読み書きを身につけることで、子どもの教育への関心も高まり、家庭や地域に学びの文化が根付いていきます。



これまでの歩み

SMILE Asia プロジェクトでは2008年の事業開始以来、カンボジアの農村地域で活動を継続し、2026年3月末までに延べ90の村で1,600人以上の女性に学びの機会を届けてきました。

教室で学んだ女性が、自ら子どもの学校の成績表を読めるようになったり、地域活動に参加したり、村の運営に携わるようになったり—。

SMILE Asia が育てているのは、文字を読む力だけではなく、自分の人生を主体的に歩む力です。

一人の母親の学びは、子どもの未来を変え、家族を変え、そして村の未来を変えていきます。



カンボジア現地へ！

2026年2月、プロジェクトの現地視察を行いました。関係者との会合、SMILE クラスの見学、過去の学習者のお話を伺う時間など、現地の今を見ることができました。



会合の様子

SMILE クラスの様子

Roleang Chak村のクラスでは読み・書き・計算の授業が行われていました。読みの授業では、ホワイトボードに貼られた文章をみんなで音読。なかには学習者が前に立ち、一人で読み上げにチャレンジする場面もありました。書きの授業では、一人ずつが持つ小さな黒板やホワイトボードを用い、文字の書き取りを練習していました。その後の計算の授業では、数字を書く練習からはじまり、実際に計算問題にもチャレンジしていました。



クラスの風景

元SMILE ファシリテーター & 学習者のみなさんと

2024年度にSMILE クラスが実施されたRoleang Kreul村では、クラス開講期間中に三つの「貯蓄グループ」(共同で貯蓄した中からお金を借りてビジネス拡大等に活用する仕組み)が立ち上げられました。今回集まっていた皆さんはそのうちの1グループに所属しており、クラス修了後もグループでの活動を続けています。

「健康、特に母子保健について学ぶことができたのが一番よかった」「計算ができるようになり、SMILE クラス修了後にビジネスをはじめた」等、喜びの声を聞くことができました。



日本の皆さんに向けた手書きメッセージを頂きました！

▶ はじめての現地視察を終えて

現地協力NGOのCWDA※の皆さんが、時に辛い悩みや経験など、学習者の方々の声に寄り添いながら温かな信頼関係を築いている様子が心に残りました。今後も現地の声や人間関係のありかたから学び、この支援の輪を広げていきたいです。(教育協力部 新井 真帆)

※CWDA…Cambodian Women's Development Association(カンボジア女性開発協会)



SMILE ファシリテーター & CWDA 代表 Phanna さんと

◆ 日本の皆様へ ◆

ACCUでは、世界の識字事情とカンボジアのSMILE Asia プロジェクトについて知りたい学校や児童・生徒の皆さんを対象に、出前授業や訪問受入れを随時行っております。

お問い合わせは、教育協力部(education@accu.or.jp)まで！

SMILE Asia プロジェクトは、個人及び法人の皆様からのご寄付により支えられています。ご支援の程よろしく願いいたします。

郵便振替口座:00120-7-365298
口座名義:ACCU アジアの女性識字振興募金

* ACCUは公益財団法人ですので、寄附金控除の対象となります。

ご支援に感謝申し上げます

支援企業
TOPPANホールディングス株式会社

法人・団体ご寄付(2025年度)
株式会社中ノ口製作所
横須賀市立横須賀総合高等学校 図書委員会

※50音順・敬称略

海洋保全教育プロジェクト —Sustaining Our Oceans Project—

海洋保全教育プロジェクト(Sustaining Our Oceans Project:SOOプロジェクト)は、日本・インドネシア・タイ・ベトナムの若者たちが海洋問題を理解し、保全活動へ主体的に参加することを目的に、ユネスコ・バンコク事務所が中心となって進めている国際プロジェクトです。本プロジェクトは、「JOIN: The Power of Clothing」キャンペーン※1を通じて持続可能な開発と地域社会への貢献を推進する、株式会社ファーストリテイリング様のご支援により実現しました。ACCUは、日本における事務局として、ユネスコスクールのネットワークを活用し、各地の学校や地域の実践を取りまとめるとともに、国際的な交流の促進にも寄与してまいりました。本プロジェクトにおける日本や各国での取組を振り返ります。



※1…「JOIN: The Power of Clothing」キャンペーンウェブサイト | <https://www.uniqlo.com/jp/ja/special-feature/sustainability>

糸魚川ユネスコ世界ジオパークへのスタディービジット

2024年11月、SOO プロジェクトに関わるタイ・インドネシア・ベトナムの教育者やプロジェクト関係者約20名が、新潟県の糸魚川ユネスコ世界ジオパークを訪問しました。地域の方や地元の高校生が主体となった持続可能な地域社会作りのための取組や、それがどのように暮らしの中に織り込まれているか、現地での体験を通じて各国参加者に共有されました。

この取組は、2026年6月にタイのバンコクにて開催された

本プロジェクトに関する地域ワークショップでも取り上げられました。各国参加者からは、糸魚川で学んだ清掃活動やアップサイクル※2の活動を、帰国後の教育活動の中で活用していることなどが共有され、また、糸魚川の町の人びとにとっては、海外からの訪問を受け入れることで世界の一員として活動する実感を得ることができたことなどが改めて振り返られました。

※2…アップサイクル:廃棄物など捨てるはずだったものに新たな価値を持たせ、より良い別の製品として生まれ変わらせること。

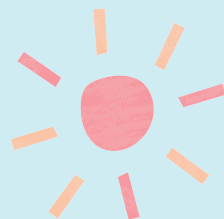
大阪・関西万博@国連パビリオンでのイベント

2025年夏に、大阪・関西万博内「国連パビリオン」で開催された二つのイベントにACCUが携わりました。

●海の日特別授業

7月21日の「海の日」に「ユネスコ・キャンパス 海の日特別授業 つなげよういのちを育む海のバトン」を開催し、ご登壇の河瀬直美氏(映画作家/ユネスコ親善大使)、田口康大氏(みなとラボ代表理事/東京大学海洋教育センター特任講師)、中

川夏舟氏(東京海洋大学3年生/igoan ユネスコクラブ(非公認)副代表)と、会場に集まった中・高校生がSOOプロジェクトで開発中のゲームを体験し、タイ・ラノー県に位置するアンダマン海(ユネスコエコパーク認定地)に生息する生物を探しながら海洋問題について学びました。また、海洋保全に関するト



クセッションでは、登壇者それぞれの海との関わりについて共有され、中・高校生から率直な意見や問いが投げかけられる非常に充実した時間となりました。私たちを取り巻く海洋環境を守りつないでいくためには、友達や家族、そして社会全体で海の大切さについて対話することが重要であることも示され、本イベントは締めくくられました。



SOOのゲーム

●SOO紹介展示

SOOプロジェクトに関する展示会が9月22日～28日に開催され、本プロジェクトに参加する各国の海洋教育に関する取組を紹介し、ユネスコエコパークを舞台にした地域の活動や、教育を通じた環境保全の実践について、パネル展示や映像体験を通じて学び、考える機会となりました。

海洋教育フォーラムin岡山 and 豊島

2025年10月に、岡山県岡山市内及び瀬戸内地域において「海洋教育フォーラム」を開催しました。国連大学サステナビリティ高等研究所と岡山市が共催する「第14回グローバルRCE (Regional Centre of Expertise on ESD)会議」の関連イベントに位置付けられ、日本、フィリピン、ナイジェリアなどから参加者が集いました。本フォーラムでは、SOOプロジェクトで開発されたゲームの体験、岡山市内及び瀬戸内地域での実践紹介、SPOGOMI × UNIQLO ※3への参加、有害産業廃棄

物の不法投棄事件「豊島事件」の現場視察などの各活動と地元の方や参加者同士での対話を通じて、学びを深めました。また、世代や国籍を越えた交流の中で、海洋環境課題が「自分ごと」として捉えられるプロセスが生まれたことは、本フォーラムの大きな成果となりました。

※3…SPOGOMI × UNIQLO:株式会社ユニクロが一般財団法人日本スガGOMI連盟と連携して実施している取組。ゴミ拾いを競技感覚で行う活動。

ユネスコスクール等 日本の学校における実践

ACCUでは、SOOプロジェクトの一環として、日本各地で行われている多様な海洋教育の実践の収集・発信も行っています。海と人がどのように関わり、地域の繁栄と安定を築いてきたか、これからの持続可能な地域のあり方について主体的・対話的な手法を通して、教室に留まらず、地域社会の中で学び、実践する取組が数多くあります。是非ご覧ください！



「学校での実践」
紹介ページ

各国の取組と今後の展望

前ページでもご紹介した2026年6月のタイのバンコクでの地域ワークショップに、各国のSOOプロジェクト関係者が集い、進捗が共有されました。同月でプロジェクト一期目の終了を迎えるタイ・インドネシア・ベトナムからは、各地で制作された教材やその活用・普及のための取組が共有され、各地の事情に適応しつつ、AR/VRやボードゲームを用いて楽しく学べる工夫が凝らされている点や、学校における活用実践例が紹介されました。ACCUは、2027年3月のプロジェクト終了を見据え、開発中の教材の完成と、ワークショップやスタディービジット、巡回展の開催など多様な参加機会を創出するとともに、既存教材と実践の相乗効果を育むことで、学びと実践、国際交流の深化を目指すことを約束しました。



海外派遣が学校を変える —教職員の学びと実践の広がり

海外派遣プログラム参加者座談会

ACCUでは、未来を担う子どもたちを育む「先生」を対象とした国際交流プログラムを長年実施しています。ユネスコ及び国際連合大学の事業として2001年より開始し、2018年度からは文部科学省の委託事業として引き継がれ、25年以上にわたって継続してきました。

このたび、過去の海外派遣プログラム参加者である3名の先生方にオンラインでお集まりいただき、所属先の学校種や地域、また、派遣された国の違いもこえて、同プログラムでの経験や学び、その後の教育実践について熱く語っていただきました。

初等中等教職員国際交流事業

交流相手国は2001年の韓国を端緒とし、2002年に中国、2015年にタイ、2016年にインドが加わり、現在も各国の機関と連携して実施しています。日本教職員を海外に派遣するプログラムと、海外教職員を日本に招へいするプログラムの2種類があります。事業の詳細・報告書等はACCUウェブサイトをご覧ください。



座談会参加者

2024年度
韓国派遣プログラムに参加



上田 敏廣 先生
中央区立佃島小学校 校長

2024年度
タイ派遣プログラムに参加



岡 真夕子 先生
愛知県立明和高等学校 教諭

2024年度
中国派遣プログラムに参加



西條 翼 先生
久喜市立菖蒲中学校 教諭

- 1 中国の高校生とサッカーで交流
- 2 中国の中学生に話を聞く



なぜ教職員国際交流？三人の出発点

—はじめに、先生方が本プログラムや学校での国際交流に興味をもったきっかけを教えてください。

西條先生(以下敬称略) 私は、学校の回覧板でした。たまたまこのプログラムの資料が目にとまり、応募しました。中国の方は英語が堪能というイメージがあって、その背景となる教育に興味があり、中国という国を自分の目で見てみたいとも思いました。

岡先生(以下敬称略) 昔から海外に興味があり、高校では英語科を担当していますが、このようなプログラムに自分が参加できるとまでは考えていませんでした。けれど、隣の席の同僚が中国派遣プログラムに参加したことをきっかけに、興

味が高まりました。これまで中学校や定時制高校への勤務も経験し、外国にルーツを持つ子を含め、様々なタイプの生徒に対するアプローチを学んできたので、一度総括し、海外の教育制度を実際に見てみたいと考えました。長い間働いていると自分の常識にとらわれてしまうので、そこから一回抜け出したいという気持ちもありました。

上田先生(以下敬称略) 私はヨーロッパでの海外赴任経験から、外国との交流は非常に大事なものだと考えていました。ただ、アジアの国には渡航したことがなく、我々の教育を今後どうしていくか考えるには現地の学校現場に赴き、外から日本を見る経験が大事だと思い、参加しました。韓国の先進的なICT教育にも関心がありました。

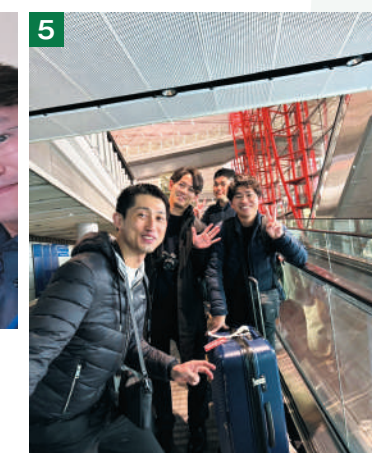
価値観が揺さぶられた瞬間

—プログラムで最も印象に残っている出来事は何ですか。

岡 タイの国内トップ校や聾学校、地域産業を支える専門学校など様々な学校種を見学する中で、タイの教育省が何を重視しているかがよく見えたことです。世界と競争し、科学や数学の分野で成果を上げていくことと、幸福度を上げ、全員に行き渡る教育をするという二本柱があり、特に、幸せになるために学ぶ「ハッピーラーニング」を掲げている点が日本の教育と比較しても特徴的で興味深く感じました。交流の中で、タイの先生方が「どうすれば教育をより良くできるか」を真剣に考えていることも伝わってきて、私自身、その純粋な気持ちに感銘を受けました。

西條 私は移動中のバスの中での時間が特に印象に残っています。プログラム参加者の中で私は最年少だったのですが、全国から集まった様々な学校種・立場の先生とじっくりお話しする中で、多くの学びを得ることができ、自分の価値観や教育実践を見直すきっかけになりました。帰国後、総合的な学習の時間の主任となり、参加者の先生方に頂いたアイデアを参考に、生徒がより主体的に学べる探究学習を軸にした内容へと刷新しました。この実践は埼玉県東部地区の研修で

発表する予定なので、今後も広く発信したいと思っています。
上田 私の場合はホームビジットですね。学校訪問の後、生徒さんのご家庭に招いていただいて一緒に夕飯を食べたのですが、インターネット等では分からない韓国のご家族の実際の暮らしを見ることができてとても勉強になりました。先生同士の交流も良かったです。韓国も日本も、不景気や少子化、受験競争の激化など共通点が多いので、教師としての悩みや仕事の喜びを共有できたことは、本当に得難い経験でした。



- 3 タイの学校で科学実験を見学
- 4 韓国でのホームビジット
- 5 移動中の西條先生
- 6 タイでの文化交流(着付け)

先生たちはどう変わった？

—プログラムへの参加を通じて、ご自身の考え方や行動にどのような変化がありましたか。

岡 以前から、教育現場で疑問に思うことがあれば少しでも解決に向けて行動するよう心がけていましたが、参加後には、何でも「前向きに挑戦する」ようになったことが大きな変化だと思います。教員は、現場で何かを変えようとしても難しい場合が多く、これまでは少し面倒だと思えることもあったのですが、今は、多少苦勞してでも身になることを得たいと考えようになりました。そうした私の挑戦する姿勢を他の教員や生徒にも見せることで、「自分も何かやってみよう」と思えるきっかけになれたらいいなと思います。

上田 私は管理職として、先生方が夢や目標に向かって挑戦できるような環境を整えたいと考えようになりました。校長という立場でも、こうしたプログラムに参加できることを示せば、先生方も「挑戦してみよう」と思いやすくなりますから。

学校はどう変わった？

—先生方の変化は、各学校での教育実践につながっているのではないかと思います。実際にどのような実践をされたかお伺いしたいです。

上田 ご縁があり、様々な形で韓国との交流を継続しています。韓国の先生方の視察を受け入れた際には、私が韓国で体験したことと同じように、一緒に給食を食べ、授業見学や教職員交流会等を実施しました。駐日大韓民国大使館の方と協力して夏祭りを開催したり、本校の教職員が「東京韓国学校」を訪問したりもしました。校内の国際理解教育では、昨年度に「韓国ウィーク」を設け、ハングルを学んだり K-POP ダンスを体験したりしました。国際的な事柄への子どもたちのハードルは下がってきていると感じます。交流で特に大事にしているのは、相手がどんなことを望んでいるか、事前に丁寧にヒアリングを行い、できる限りその要望に応えることです。ニーズに合わなければ次の交流につながらないですね。遠慮なく意見交換できる関係性作りとつながりを大切にする姿勢が大切だと思っています。

西條 私は残念ながら中国との交流は実現しなかったのですが、ACCU にインドの学校を紹介いただきました。日本にいると英語を使う必要性を感じる事が少ないので、英語を話さざるを得ない状況を作りたいと思い、自国の文化や学校生活を英語で紹介し合うオンライン授業を行いました^{※1}。本校生徒は合わせて約130名参加しました。準備段階は両国の時間感覚や通信環境の違いなど苦勞した点もあり、また、生徒たちも最初は「恥ずかしい」「自分の英語が伝わらなかったらどうしよう」と不安を口にしていました。そこで、本校の生徒同士で、相手をインドの生徒だと思って何度も練習して、自信をつけてもらいました。実際に交流してみると、生徒たちは英語が伝わった実感をえたようで「次はいつやるんですか？」

教員はどうしても、目の前の子どもたちのために現場を離れられないと考えがちです。でも、外の世界を見て、その学びを学校や子どもたちに還元することは大きな刺激になると思います。何より、挑戦する背中を見せることこそが、教員の大きな役割だとも思います。

西條 先ほど岡先生が仰っていたように、教員は変化を起こそうと思っても難しいことが多いですね。私もこれまで「子どもたちのためにもっとできることがあるのではないか」と自問自答することが多々ありました。けれど、プログラムで出会った先生方から様々な視点を頂いたことで、自分の考えの前提を見直し、教育観をアップデートできたように思います。帰国後、地域の教育委員会にコンタクトを取って相談するなど、以前より積極的に行動するようになったのは大きな変化だと思います。主体的に学び、行動することの面白さを実感できたことが、一番の収穫でした。

と、積極的な声が聞こえてきたのは嬉しかったです。

岡 私は海外と日本の生徒がペアを組み、学校生活や日常について手紙に書いて送り合う「手紙プロジェクト」を企画しました。本校は海外との交流が盛んですが、選ばれた生徒しか参加できないことも多いので、一学年の生徒全員に海外とのつながりをもってほしいと思い、先ほど話した中国派遣に参加した同僚と一緒に取り組みました。ただ、生徒全員とな

7 手紙プロジェクト(タイの生徒からの手紙)



※1…交流の様子は令和7年度初等中等教職員国際交流事業実施報告書(p.14)でもご紹介しています。右の二次元コードからご覧ください。



ると各教員の足並みを揃えるのも一苦勞で、海外生徒とのペア確保にも先生方のつてを頼って、オーストラリア・ドイツ・中国などいろんな国に協力をお願いする必要がありました。私の授業ではタイの日本語クラスの生徒と手紙を交換したところ、英語と日本語両方で書かれていて、生徒たちはびっくり仰天していました。もっと英語を頑張りたいと刺激を受けた子も多かったです。高校では、時間割等の関係でオンライン交流も難しいことが多いのですが、手紙だと時差の問題もないですし、デジタル化が進む今、手元に「物」が届くのは良いことだと思います。手紙の向こうに「体温のある人」がいることを感じてもらいたいです。

—同僚の先生方からの反応はいかがでしたか？

上田 私の方でできることは引き受けていますが、先生方をお願いしなければいけないことがあるのは確かです。その際「尻込みしないで挑戦することはいつか管理職になった時にきつと役に立つよ」と伝えていますが、本心は分かりません(笑)。ただ、先生方は本当にすごいなと思います。最初は戸惑っていても、いざ始まるとしっかり物にして、楽しんでいる。例えば日韓教職員交流でキンパ(韓国の海苔巻き)作りをした際、最初は2〜3人集まればいかなと思っていたら、たくさんの先生が参加してくれました。こうした経験が思い出として先生方の中に残って、他校に異動しても「国際交流は楽しい」と思えるようになってくれればいいなと思います。

西條 インドとの交流では、管理職や同僚の先生方から面白

先生たちのこれから

—先生方の今後の目標ややってみたいことをお聞かせください。

西條 今回、上田先生や岡先生のお話を伺って、私も様々な国と交流してみたいと思いました。単発でも構わないので、まずは子どもたちが国際交流する機会をできるだけ多く作りたいです。私自身も多くのことを吸収しながら、日本の教育をより良くすることに少しでも貢献したいです。

岡 私も、今年度も手紙交流ができたらいいねと話しているところです。それと、西條先生のようにきっかけをつかんで、更に他の国とも交流してみたいですね。本校の近くにあるネパールのカレー屋さんが、お弁当を作ってくれたりして教員

ACCU職員後記

先生方のお話からは、本プログラムでの経験や出会いが教員としての意識の変化や新たな挑戦を促し、その学びが学校や地域へと広がっていることを実感できました。国際教育交流部では、今後も本事業を通じて、学びとつながりの輪を広げてまいります。



8 佃島小学校での韓国教職員訪問受入れ(日本の給食体験)
9 葛蒲中学校とインドの学校の交流の様子

そんな実践だねと、背中を押していただきました。実は、管理職の先生のお一人が、私のプログラム参加の話をきっかけに海外派遣に関心をもたれて、別団体のプログラムに参加されたんです。自分の挑戦が周りの先生方に少しでも良い影響を与えることができていたら嬉しいですね。

や生徒とも関わりがあるので、このつながりから何かできないかなと考えています。また、タイでAI技術の活用が進んでいることを目の当たりにしたので、私自身も学び続けていきたいと思っています。

上田 私は現在担任をもっていない分、一人でも多くの先生に、このようなプログラムに気軽に挑戦してもらえるような環境を作りたいと思っています。自分が様々な国と交流するというよりは、先生方にこうした機会を紹介したり、人をつないだりしながら、新しい一歩を踏み出す後押しができれば嬉しいです。

—このたびは貴重なお話をありがとうございました！